

えどがわの女性性

vol.1
2011年
1月



江戸川区
聞き書き
研究会

聞き書き研究会とは、江戸川区で生活し、江戸川区を愛し、強く逞しく生きた女性の姿を江戸川区女性センターの区民ボランティアが「聞き手」となって編集し、文書として残すための活動です。

「母の背中が教えてくれた」

おおそねようこ
大曾根 陽子

1932年(昭和7年)
墨田区本所生まれ、
北小岩在住。



41歳で民生委員に

私が住んでいる北小岩は江戸川区の北の端で、すぐ隣は葛飾区。荒川区の田端から終戦後の昭和20年に13歳で来たんですよ。その頃は、「あー」と言えば「ああー」って響くし、夕方になれば裸電球に蚊柱がぶんぶん立ってね。ちょっと向こう行くと田んぼ。柴又の帝釈さまへ土手伝いに行く人が見えるっていうような所ですよ。お店もあるけどまばらでね。こんなに家がびっしり建っちゃうようになるとは思わなかったですね。

その時代は近所に農家の方が多くて、とっても親切なの。市場へ行く途中に「はいよ」なんて大根を玄関先に3本4本置いていってくれるんです。引っ越して来てそういう優しさはうれしいですよ。親切にされればこちらもやっぱり親切にしたいし、後から来たものだからお役に立ちたいという気持ちがありましたね。うちの父も母も田舎の者ですから「寄ってけよ」「飲めよ」「食えよ」って。それで早く地域に溶け込めたんじゃないかと思うんですよ。

私は、3人姉妹の末っ子なのに親の最期を看たんですよ。まん中の姉が早く亡くなって、上の姉が「あなたには申し訳ないけど、お願いするわ」って嫁いでしまったからね。その時は学生で「いいわよ」って言ったけど、家を任されるって大変な事でした。うちの父は20何年寝ていましたから、私は母と主人と、父の介護をしながら4人の子どもを背負ったり抱いたりして一緒になって育てました。

民生委員になったのは41歳の時でした。前任者の方がお引越しになって、途中から引き受けたから34年と2ヶ月なんていう中途半端になったんでしょうね。民生委員は各自治会の会長さんが推薦するんです。「三世代仲良くやって、とても見ていい。そういう人にこそやってもらいたい」と口説かれました。私が一生懸命断っているのに「子どものことなら、手伝ってあげるから。推薦されたのならおやりよ」と横にいた母が自治会長さんの後押しをするので断れなくなってしまったんです。

何時に出て何時に帰って来るというお勤めと違いますし、病気になることもあるから、家族の協力がないとできませんね。民生委員を定年まで無事に勤めさせても

らったのは、母の援助があったし、愚痴も言わずに助けてくれた主人と子どもたちの支えがあったからですよ。だから長年勤めたご褒美にいただいた勲章も宝物だけど、私の宝物は家族ですね。

地域のパイプ役

「民生委員の仕事はゆりかごから墓場までだよ」と先輩から言われましたけど本当です。妊婦の方たちからの相談もありますし、熟年者へ区からの物をお届けしたりもします。何があったか一つ一つ覚えていたら民生委員はできないです。ただね、自分のやったこと云々よりも、その方たちがどうしていらっしゃるかなって思ったり、亡くなれたなんて話を聞くと、ああかわいそうだったなあ、それも一生なのかなあなんて思ったりしますね。

若い方が、籍も入っていないけど妊娠して、ちょうど病院の前で産まれそうになってしまった時の話。その病院が引き取ってくれて産んだけど、お金がなく病院が困ってしまった。それで、民生委員っていうことで私が呼ばれて、その赤ちゃんのお父さんを探したこともありましたよ。でもそのお子さんは不幸にして一日で亡くっちゃった。産まれて良かったという喜び、若い方が出産するお金もないのにそういう状態になったという事の矛盾や赤ちゃんが死んじゃったという悲しみ。一日二日で人の一生を見てドラマのようだと感じました。あのお母さんはどうしているのだろうかと思う事がありますよね。

家に帰りたけれど電車賃が無いと、大晦日にうちに来る人もいましたね。民生委員は、お金は絶対あげたいけないですよ。少しくらいならという気持ちを振り払って、お餅を持っていってもらった事もありましたね。

「家に入れてもらえなくて、寒いのに表に子どもが居るよ」って、おまわりさんが知らせてくれ、その子の親と話したなんていう事もありました。どんな子でも、どんなにいじめられても、親の悪口言わないですよ。「あんたお母さんに?」と聞いても、「違う、僕転んだんだ」って言う。子どもはお父さんお母さんをどれ程大好きなのか。その大好きなお父さんやお母さんが小さい子どもをいじめてはだめよね。

地域で相談されるという事が民生委員の仕事ですけど、役所とのパイプ役だから、全部自分が始めから終わりまで立ち会うという事じゃないんですよ。これは福祉、それは保健、あれは熟年者というように相談をつなげると、役所のいろんな部門が対応してくれますから。今考えるといろんな事ありましたけど、やっぱり私は地域の人達に育てられたんだと思いますよ。

お節介が役に立つ

4人の子どもの通った小学校が近くにある、PTAや評議員として出入りしていたんです。民生委員としても学校訪問というのがあって、校長先生や生活指導の先生とお話し合いしてお互いに疎通を図るんです。それに元来図々しい性格もあってか、私は昔から学校には何の抵抗もなく行けたんです。



◆小学校で学習補佐のボランティアをする大曾根さん

平成15年に、学校から「すくすくスクール」を立ち上げたいというご相談があって「それじゃ、こんな高齢だけどやりましょう」とお手伝いしたんです。すくすくスクールというのは、地域の方たちの力も借りて放課後の学校の広い施設の中で児童をのびのび、すくすくと育てるという活動です。

保護者の方たちが非常に心配されてね、何回か会議を開いたけど大議論になりました。そこで私が「もう、そんな事おっしゃらないで。区が大変素晴らしい事を計画したんだから、一緒にやりませんか?」って言ったのよ。そうしたら、あるお母さんが、「大曾根さんがそう言うってくれるなら、大丈夫」と提案を受けてくださったんです。役所の方からも「あの時、大曾根さんが言ってくれたんで良かった」というようなお言葉をいただいたけど、考えるとただのお節介よね。

そんな関係で、すくすくスクールを支援するサポートセンターの役員さんも私が探したんです。やるからには気心の知れた方でないと難しいと思ったので、私がいつもお付き合いしている方たちをお願いしたんです。それがあってか、この地区の学校は始めからスムーズにいきました。私も趣味のお花で子どもたちと遊んだりして、今では良いお節介をしたなと思っています。

私は75歳で民生委員を定年になったんです。仕事を辞

めておうちに入っちゃうと、ボケちゃうんじゃないかなあと。それで、お友達のすすめもあって江戸川総合人生大学子ども支援学科に入学したんです。皆さんとお話し合いができたから、また違った意味で自分の活力になるかなと思う気持ちも半分ありました。入ってみたら、楽しくって、2年間があったという間でした。

人生大学では、地域還元ということも習いました。あとね、地域性というのを、私は勉強して考えましたね。研究テーマを現場で体験して卒論にまとめるということで、私の年齢になって何ができるのか悩んだんですけどね。私の子育てを助けてくれた母のことを思い出して、その感謝の気持ちで、子育ての施設や小学校にお手伝いに行ったんです。

先生のお話に集中出来ない子どもの手や背中を撫でてあげるだけでうれしそうな顔をしてくれる様子を見ると、高齢者でも役に立つのかなと思いました。そういう「気負わないで、気やすく、その場で、なんでも自分なりにやってあげられるボランティア(お手伝い)」を、「縁側の役目」って考えたんです。縁側は、庭に面した広縁で、靴を履いたままで立ち寄れるところですよ。猫が日向ぼっこしているような、のんびりした、声をかけやすい雰囲気ですよ。

おばあちゃんのボランティア

学校評議員という肩書きで行くとね、やっぱり先生も構えちゃうと思うの。だから私は縁側の役でいいと思う。登校の時の見守りで、ただ「おはよう」じゃなくて、巨人の大好きな子に「昨日、野球みたよ、勝ったね」と声をかけて喜ばれるとうれしくなっちゃうんです。一人遅れてくる小さい子が、寒いもんだからピタッとくっついてきてね、孫みたいに思っちゃう。

私の5人の孫も、それぞれの所で皆さんにお世話になっていると思うんですよ。だから、孫と同じような子どもに少しでも何かやってあげたいって思ってる。子どもたちにもお母さんたちにも「ああ、あんなことしてくれたおばあちゃんがいる」とって思ってもらえればね。

人というのは、親子ばかりじゃなくて、地域、他人とのつながりがとっても大事なよね。だから、今のお母さんや子どもに「一人で悩まないでね。相談してよー」って言いたいよね。民生委員もいるし、私みたいなお節介おばあさんもいるし、PTAの役員さんもいる。その人たちができなきゃ誰かにつなげてくれるから。

私、これからも学校や子どもが良くなるならお節介しに行きますよ。良いお節介をね。

